

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 8



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきただ。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一一〇一八年八月号（通巻七二三号）

◇今月の二十首詠……歳月

永塚節子 2

■作品[A]

松永智子・牧 雄彦他 4

■六月号作品批評

A 小野雅子・山野幸司

永塚節子・新明彰子

B 岩里周英・植田和子

80

46

A C B A

松平正守他
餅原ひろ子他
後藤順子他

■オリーブ集

近内静子・酒井 牧他 48

有馬さと子・牧 栄美 16

オリーブ集・田土才恵・伊東ミイ子

18

◇今月の二人

今月の二人・作品評

福島発・風のたより

53

『特集』写真・歌合わせ—— [責任編集] 田土成彦

設楽まゆみ・横田美穂子・阿部洋子ほか

最近の歌誌より

108

写真◇田土成彦・久我田鶴子

久我田鶴子

18

◆第一歌集の頃

朝井恭子・檜垣美保子

80

私と短歌との出会い (192)

山角和子 19

支社・グループ掲示板 (地グループ)

108

浜谷久子

47

■第66回地中海全国大会 (福島大会) 報告 実戸千佳子

神田通信……表3

107

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子

44

(表紙デザイナ) Tazuko Kuga

歳月

永塚 節子

昭和十七年生まれ。
銀座グループ所属。
歌集に「かえるつば」がある。

皂莢さいからちが西海子さいのかち小路の名の元と知らぬままに通いしつきひ

さいかちの芽は食用に実は薬くすり枯れたるのちは器に変身

由緒ある茶室の由来は言わぬまま師は座りおりただ稽古のみ

作庭は松本剛吉茶室あり待合作り流れめぐらす

茶室へと誘う飛石渡りつつ改めて知る配置のよろしさ

大木となりたる赤松それのみが庭の歴史を見つめ來たりし

雨香亭使われぬまま今はただ観光客の立ち寄る場所に

人気なき茶室の柱を仰ぎおりやぶ椿ひと枝今はまぼろし

平成の終りに近づき赤松の見て來し明治へ思い及ばず

この町に足あと残しし人多く遠くて近い明治の時代

盲腸を拗らせこの地に没したる秋山真之『坂の上の雲』

半世紀この町に住む後北条より前の歴史は知らぬままに

小田原に永塚という地名ありわれの家との縁なけれど

この辺り郡家こうけありしか永塚を冠する遺跡群觀音堂あり

古代にも小石かわらけ敷きつめし舗装道ありこの界隈に

塚というは墓のことと知りしより暗きイメージいつも持ちいし

この地より移り住みたる人々の末裔ならんわれの祖先は

余所者と思ひし氣持ちはしらに薄れゆきたり祭囃子に

おだやかな気候の地なり雪降れば放映されし昭和の時代

うかららは誰もおらねどこの町を終焉の地と心に決める

作品 A

松 永 智 子

ひびき

・嵐

椿の木花咲きをはり葉のみどり硬きまなり風の中なる
そのみどり濃くかたくして椿の木花くれなるに庭のひとくま
けふの空蒼ふければ花終へし木の下に立ちただふり仰ぐ
暗緑のことばの林をゆくひとの悲のひびきなる影なりとほし
空とほくとほきこの夜音の絶え灯のなく衝闘なりふかし
花をはりまたひそかなり水の上光ひとすぢ移りゆくみゆ
しらみくる障子のかげをみてあれば明けはてたり音のなくして

牧 雄 彦

みどり噴く

・大

存分に枝をひろげよ花散りてみどり噴きたる川辺のさくら
兄の臥す病院のめぐりあたらしき命萌え出てみどりがふるふ
咲に建つ病院に臥す兄の病さらには進みて言葉すくなし
みどり噴く咲にひびけるほとときすのこゑ消えて深き静寂戻る
桜の木見る間に繁り下をゆく汝が小さき背を木洩れ日動く
暗闇を低く舞ひたるヒメボタル短きいのちを息ひそめ見む
うす雲を透かして白き日がにじむけふ逢ひしこと早や過去となる

松 浦 稚 子

いのちの猶予

・羊

手術後のわれのいのちをよろこびし人々へ送る猫の絵ハガキ
記念館の窓よりのぞむ横浜港いのちの猶予ありて輝く
ひそかにわれを気遣いくださりし心を抱き丘のぼりゆく
「すいっちょ猫」「霧猫」送らん今日ここに足運び得し記念のわが日
「霧笛」の主人公に漲る青春を体しそぎしか大佛次郎
記念館窓の向うのバラ園に人々動きいる音もなく
古代ギリシャ柱頭文様のアカンサス門前にひらくこの夏を待つ

三 浦 好 博

独りの顔

・銚

気遣ふといふ程もなく歌会果て独りの顔になりて帰れり
ダーバンのシャツは父の日のプレゼント老い我に尚羽化とげよとぞ
花につく毛虫をよけて丁寧に草むらに移すはよ蝶になれ
削除とは冷たき言葉我もまたかくさるるならむ故人を消しぬ
「腹へつた」と少年入り来老い我ら腹を空かせし頃懐かしむ
一人となる日もあるだらう今はまだ一人伸びてボランティアに行く
「三浦氏が刈りに来るから早く早く咲かなくてはね」振花たちは

宮本靖彦

五月雨

・凌

マンションの狭間にのびし鬼菊花の紫地権主張す

真夜中も五月の雨は降りつき遣りし除草剤葉より流せり

猪名野路は五月の風のさやきて緑道に立つ大き捕

古社猪名野神社の白砂に坐りて老歩のすこやかを謝す

竹柵につる巻かぬ胡瓜新種とかだだつ子のこと土に寝そべる

さ縁の小粒トマトが八つ十枝に連なり五月雨光る

引出ゆ四十年前の子の作文我にラジカセ買へとの陳情

二 好聖三 梅雨入り

・伊

雑木々の葉叢に落ちる雨音を肥満の猫の傍らに聞く

梅雨入りの報が流れる昼下がり間断なく雨は降り継ぐ

煙草吸う主を露骨に避けている窓辺にきつく見返しながら

煙草吸う主に距離を置き猫は蔑むように憐れむように

もぐらもち銜えて帰る牝猫がしばらく遊びやがて飽きたり

桜桃を食い漁りいる栗風がいて枝渡りする逆さにもなる

父親の誕生日さえ忘れてた六月六日は梅雨入りの日と

御代田澄江

メイストーム

・茨

春嵐長靴レインコートに防備なし郵便出す 夕刻晴れぬ

六歳の女兒の隣に百三歳の男性並ぶ愛き世のおくやみ

犬を飼ひ生育散歩われに難しルームウオーカー置きたしと思ふ

然あらんか夫が（スポーツ）ジムに通ふとて両手一杯切符買ふ 夢

連休に長子夫婦は風邪引くと真紅のかーネーション郵便にて届く

「マイストームだね」気温がぐんと下がる朝しまひダウン着て出で行く子言ふ 「ばね指です」と医師左拇指にギブス掛く広辞苑にはガンクリオンとも

茂木斌

達磨ガヘル

・埼

桐生なる自然観察の森にきて鳴きたつ蛙何ガヘルだらう

レンジャーに名前を問へば即答ふ「東京達磨蛙と言ひます」

〔ええ、殿様ガヘルぢやないんですか〕「違ひます、東京達磨蛙と言ひます」

東京を冠する蛙のゐるなんて言へばレンジャーにつこり笑ふ

鳴きたつは東京達磨蛙となんそのにぎやか森は若葉

梅檀の花咲く頃は愛媛なる梅檀寺など焦がれてならず

モナコGPガスリー七位のフィニッシュに 二度目の入賞バンザイホンダ

もとむらしげと 福島の旅

・そ

福島へ向かう車窓に映りいる遠き山並みはいすくならむや

七階へまずは下りぬ湯の宿はバスを降りれば八階に着く

初めての人との歌会たちまちに心ほぐれて笑いも起ころ

歌を詠む心ひとつに集いたる仲間とともにふるさと唱和す

画家の夢捨てし智恵子は安達太良のほんとの空を心に抱く

安達太良の山上なるほんとうの空に還らず智恵子は逝きぬ

フクシマの詩人の声が訴えるかなしみを胸にかかるて帰る

八乙女由朗

つばくらめ

・柴

「東堂」とうけだるき職につらなりて青空の下歩を詰めあるく

鷺色の駒にまみえず現代は白鷺のうから青田をあるく

長き間さわることなき「雪の下」初夏に花開き風にそよびり

くもり空に飛翔を見するつばくらめ昭和時代の思いを囁す

木の間より見ゆる田畠の道ありて学生ひとり自転車に過ぐ

他力なる世間に生きてつかれたり自力のみにて及べぬものを

伝授するもののあらねばひた寄りて無心に刈るへし余地の草刈り

山 下 雅 子 予 感

・習

吉 永 惟 昭 梅 雨

・熊

花冷そのポストに沈む真白なる封書にふっと計の予感せり
みちのくの戦時の苦しみ語らいし仲間また逝く米寿の年に
櫛の歯の欠ける思いのさむざむし平成の日々削られて過ぐ
さんさんとひかり穂しき春の海七十年のきずな尊し
歯切れよき声のひびきし電話口あなたのみちのく訛りにひたりき
日だまりのみ堂にさがる絵馬あふれ拂りそれぞれの明暗あらむ
上りきて見下ろす視野に点々とあかり増えつゝ間に入りゆく

横 田 敏 子 術後の時間

・福

送り来て娘ら帰りたり今宵から独りの生活氣を引き締めん
あれこれと制限さるる動作ありてひとつ所作をゆっくりこなす
自ずからスローライフの日々にしてゴールドキウイ卓に熟れゆく
家中の窓開け放ち甘やかな五月の風をひと日楽しむ
留守の間を義弟が手を掛けられアマリリスの大輪今朝開き初む
直径が二十センチの花四輪支うる茎の太くたくまし
次々と顔上げて咲くアマリリス共に過ごさん術後の時間

吉 内 尚 彦 瓦 屋

・浜

瓦屋の「鬼」となる土こねる人古刹の門の「王のこと」
大きな土塊を頭上に持ち上げてどすんと落とすを繰り返しおり
ひねもすをこね上げし土黒々と乾される上にかげろうゆらゆら
田園のなかをガタゴト真夜走る貨物列車の夢をみており
思い出は昨日のことより鮮明に十八歳の春を浮かばす
いすくより来たる人らか住みこみの瓦職人異邦人めく

朝鮮へ帰り行きたる朴君よムクゲは白く咲いてるでしうか

母の日の淡いピンクの紫陽花は年に一度の嫁の花便
多年草限りまで咲け母の日に届きし紫陽花地に戻しおく
植えしあの紫陽花にきてからみ合う紋白蝶のつかい離れず
磨汁の白き濁りは遊学を阻みし飢えの戦後を齧す
米粒を雀啄む露台まであ撒きにゆこ車椅子の妻
ブチブチとボリの粒子を潰す妻被爆の怯えぼぐせるのかい
姪娘よ許せぬめぬめ道いするに塩ぶっかけ悪童のころ

朝 井 恭 子 白 烟

・森

風蒸る五月を風邪に臥しており仮壇の花萎れしままに
若き医はカルテ書きつつ我に言う「年寄りの風邪は長引きます」と
診察を終えぼっとして独り言つ「待つは二時間 問診一分」
義妹の送りてくれし白粥のパックに梅干し添えてありたり
久々に炊きたる粥の白き湯気のおぼおぼかかる心を包む
羽団扇のごとき葉を付けモンステラ窓際占めて氣根伸ばしぬ
真昼間を裏山に鳴くうぐいすの短き声に季逝くを知る

磯 田 ひ さ 子 ひたひたと

・森

ひかり降る熱海をめざす待ち合はす人のゐることただにうれしく
ジヤカラソナの青紫に咲く熱海めぐり合はせのよき日といはむ
あぢさるの藍あふれをり貫一が下駄で足蹴にする像の辺に
あから引く像のかたへに一代目の「お宮の松」の旧りていさをし
思ひ出のひと日とならむ語りつて海岸通りを歩むたまゆら
いくたびも息をととのへ坂多き熱海の街の石段のぼる
海の青 あぢさるの藍 空の蒼 古稀過ぎし身をひたひたと染む

市原志郎

夏来たる

・萬

奥田清和

若楠

・大

おや雨が降って來たぞと寢室の中にてつぶやく夏が來たのか
いつも同じニュースのみなるあちこちのテレビ画面見あきておりぬ
視たいことあちこちさがしてチャンネルを回して夏の一日が終わる
はるかなる日本まで來てスポーツな人の笑顔のやさしきことよ
リハビリを終えたる時に音もなく降り来し雨のありたるを知る
ほくほくと芋を食べおりがさと手を探みており五月末日
足腰の痛みといいて車椅子小雨降り出す家路にてあり

市原 やよひ

レゴ

・萬

ユーチューブじつと見つめていし孫のレゴにて作る自動販売機
キラキラと瞳まぶしきレゴに成る自動販売機持ち来し孫の
レゴ製のからくり箱のからくりを氣負いて説けり我を見つめて
午前二時唐突に鳴る機械音〔〕を掃除しているプリンター
何事の覚えか花は季を知りそれぞれが咲く一齊に咲く
電話より合格の声届ききて孫も我らも春が始まる
散水の先に二重の虹生れて梅雨入り近しの予報ありたり

大浪 美雪

浜は庭

・森

うねりくる春の海面は紫のかけりを帶びて岩にしぶけり
湾のなか起重機を操る船のあり海に土木の工事はじまる
赤、青のモザイク模様の高速船チヨロQの如く翔けゆく
朝採りの青のりひじきいただきぬ友は浜辺を庭と呼びおり
流木を焼きたる焼に背を向けて尻をぬくめる老人ひとり
昨日の鱧旨しと言え巴魚屋は「潮目かわって今日はねえよ」
佃煮にせんと湿りし海苔ちぎる摘まれし朝の姿にもどし

国破れひそと育てし若楠のいま中空に命かがやく
終戦時わが受持ちし組の子ら幼な名に呼ぶ八十路すぎしを
戰禍なほ残る家路を肩よせて下校せし日を語る教へ子
たはむれて育ちゆくなりいちめはたいさかひなども聞かざりしかな
黒きメガネにリンゴの歌を唄ひるし明君今はエンゼル歌手か
遠来の友を迎へて「次会は段位を競ふ橋中の樂」
学長も社長も隠居も児にかへりわれはひたすらうま酒を酌む

奥田陽子

朱花

・羊

樹の花の匂いこもれる坂の道梅雨に入りしと誰か告げいん
しきりにも卯木こぼせる坂のあり昇らんとして空のみずいろ
日に焼けしサッカーボー少年ふたり居て声交わりする前の清しさ
雨の隠れている空のさま見あげおり忌に集い来しわれらの歩み
巡る忌のみどりの記憶いきいきと葉を揺らしおり樹樹は墓地まで
花石榴朱の眼に染む歳月を重ねきたりて今日は義兄の忌
雨過ぎて草の明るさむせかえる緑のなかを死者に近づく

小野雅子

みどり

・羊

ほほゑみに出迎へられて福島の駅に始まる全国大会
青空に吾妻小富士の頂は昨夜ふりしとふ雪を残せる
背の高きビニールハウスに守られてさくらんばいま実りゐるらし
目の下に広がる屋根の重なりの一つを目指す今宵のやどり
樹のみどりふかき底ひに一筋のひかりとなりて水ながれる
さへづりは近づきてまた遠ざかり道おほふ木の濃くなりてゆく
はつ夏の夕日背に浴び帰りゆく四人の一家幸にあふるる

菊岡栄子 消灯

・漣

その妻に嫌われているらしき人ショート・ステイの八十翁
イケズする女人は話しかけ今日は素知らぬ顔をしている
ある週は四泊五日のショート・ステイ楽しめぬ故テレビを見ている
スタッフはPSPの患者われに良いことを言うと声掛けくれる
消灯の時間早くて長き夜健やかなりし頃思い出す
孫たちはお受験の為忙しきもう半年も会えず若葉
許せずに来たりし娘の結婚を病得てより許せる吾か

菊地栄子 春なれや

・湾

腕時計みつめ数分待つて居るひとりに過ぎゆく時はがゆさ
剪定の枝を揃えて束ねゆく定めなき時間何かいとい
わたしならこうはならぬと蔑みつつ時間つぶしかテレビドラマは
春なれや声もほがらかに相寄れる雀のカップルそこここに見ゆ
うす紅を慕いつつ咲くを待ちわびしクリスマスローズはみな白き花
おそらくは育たぬだらう膨らめる土中の種をまた戻したり
土曜日も車検整備場は休みなし明かり華やき夜が深まる

木村文子 豊平川

・羊

幾つ目の橋まで行こうかぼわぼわと湯気が川より立ち上りおり
上空は風が激しく吹くらしく綿毛のことく雲が過ぎゆく

雪上のパークゴルフのコースにはなだりあるらし球戻りくる
見えてきた到達点と思うときこんなに長い一秒一秒

先端のあかみは春の証かもチユーリップの葉は土より出づる

自転車に片手をかけて十字切り留学生は爽快と行く
豊平の川辺に拾いし石ひとつ両手で包み今日から「春」とす

草刈十郎 ランドセル

・世

春めきて木々の芽吹きのはじまりぬ森のささやき聞こえくるがに
人減りし村落淋しつばくらめ明るき空を連れて来たれり
雛壇に人形静かに並びて時の止まりしごとき雛の間
山奥へ進むにつれて山笑ふ青空に春と一字書きたき
蟻出て早も曳きゆくものあり一途に生きる姿のここに
木の芽吹く一樹に万の命をば感じ自然の力を思ふ
青空へ思ひ思ひにこぶし咲き新入生のランドセル行く

國井節子 紋章

・春

先をゆく仔鹿はときどき立ち止まり藤の落花を美さうに食ふ
山藤はいたるところに垂れて咲く春日大社の紋章なれば
名にし負ふ砂すりの藤風吹けばいろはにほへとちりぬるばかり
水張田を茜に染めて陽の沈む瑞穂の国のこれぞ水無月
幼き日母と鳴らしし草笛のすすめのてつばう唇にやさしき
卓球もバドミントンも早技でテレビの試合に目を回したり
みちのくの山に浮き出づ雪うさぎ種播く時を教へてくるると

小泉泰清 爽やか

・う

爪先の虫を殺め立つつくす神鬪せわが慎みを

梅雨入りが間近かとテレビに予報知る青葉輝き爽やかなれど
窓越しに青葉の光眺めつ笊蓄麦臘の五月爽やか

十数年まへ前立腺癌の手術受け長らふ命天に謝するも
老人の施設へ友等続きに入る風の便りにわが身重ぬる

仮壇に読経を供へ先祖靈今日の一日の無事を祈りぬ

日常の些事に心を込めて詠み満ち足りたれば晴れやかとなる

早起きの御利益もらうゆうゆうと雉のあゆみて庭よぎりゆく
砂はこび一山失せし砂取場ひとに網張りうばわれし雉
起きぬけの耳にしたるは雉の声物干す近くに鳴く不如帰
草取りの遠く近くに移りなく不如帰いて五月尽日
玄関に庭に居ますの札を掛け心おきなく手入れ楽しむ
ふえすぎの二人静を掘りあげて腰をのばせば恋の舞つ空
ビルに住むひとの別荘森のごと樹を植え見えぬ柳の赤花

小西美智子

芳名録

・大

ゴッホの主治医の芳名録に残されし茂吉・輝子の水茎わかしけだるさをおし美術館に誘うは“赤いショキの少年”なりき大戦のさなかに罹かかる中耳炎ひとよ悩ます持病となりて吹雪くなか父に背負われ通院の背なのぬくみがいまよみがえる会津藩の作付けしたる“緋の衣”余市の里に酸き味残す除染済みし飯館村に植えられてトルコ桔梗のむらさきの渡しひっしりとひしめきひらく紅のさつきの花に勢いのあり

小林能子

励まされつ

・羊

真夜中の羞しき明かり寝返りもナースの声に励まされつ
九時消灯六時点灯病棟の規則に長き夜をもてあります
恐るおそる車椅子漕げば非常口に貼りつき冬の空が近づく
歩行器に任せて一步わが足はおぼつかなく床を踏みたり
非常口鎖されてて歩行器のわれを誇る冬の青空

切符と福島からのメッセージ 曲目は「海」そして「火の鳥」

「東北ユース」東京公演の切符を歓ぶ友に託す喜び

近藤芳仙

無言のままに

一言の予告もなしに親友の逝く四月七日を我は覚らざり
脳ドック勧めて友も約せしに治療後の我と逝きたる友と
絵手紙の腕を上げしと送り來し親友のカレンダー遺品となりぬ
離り住む友にはあれど電話には彼の日のままの声に話しぬ
十八歳の卒業旅行は群馬まで文福茶釜にならぶ写真が残る
未だはやき別れと思ふ古稀すぎてゆるり遊べることからなるに
仙台の何処の方か友が墓安らかにあれ遠く祈れり

坂上直美

花・初夏

・天

山間の風吹き抜ける露天風呂野の花白し吾が肌白し
クローバー花輪編みしは幾年の昔のことぞ今野に溢る
人の世の愛いは多し雨の中青の色濃く紫陽花の咲く
何洗い何を清めん紅のブラシフラワー南のホテル
線路脇ディイジー群れ咲く小さき駅今は無人の駅でありしよ
病み給う姑上の庭ああ皐月サツキの花の咲き盛りいる
姑上の留守宅に来てます為すは仮の花の水替えること

坂出裕子 月夜

・洛

夜目しるく月に輝く花水木まなうらにしてねむらむとする
花が咲き花が散りそのくれなるをいちまいいちまい拾ひたる日の
いちめんに庭面を染めて花水木散りばへるさま今もまなこに
雲を見て空を見て咲く花を見て今日は電車で孫のお守りに
いくたびも窓をひらきて満月の輝くを見る天のまほらに
月を見て星をながめてねむる日々したかったのはこんなことかも
天高く輝くさまをまなうらにうつしてねむる満月の夜は

佐久間辰 日乘（一二三）

・湾

たらちねの如くにわれを包む霧残り少なき生への情けか
物すべて杳となりて見えぬ過去、未来も知らずただ生きている
わが生きの反復に戻る水もなしだ生きているは呼吸のみかも
季が来ても散らざる花のいまだあり如何なる魂のある花なりや
數知れぬ歌の数々それゆえに読む氣もあらず虚構の歌は
齢すでに九十余りを生きて居て証はあらずこの先のこと
シャツに服ネクタイ、ベルトと師のお下がりを纏いて時に厳しくもいる

佐久間すゑ子

京鹿子

・湾

京鹿子の花が咲きました。愛しいお人の訪れのように
京鹿子の花が咲きました。誰かに話しかけるように寄つてくる
京鹿子の花。氣難しくて人見知り。でも少し寂しそう
「それでね」お話を切ってしまった。伏せた眼差しが思い出される
京鹿子の花がゆれます。今消えたお人の手風のようには
愛しい思い出を提げて京鹿子は今日も咲いています。つづましく庭隅に

佐藤道子 異常気候

・甲

紅ピンク散り敷く散歩道寒き五日に鶯鳴くも
寒冷渦の説明もなき気象厅人工操作いづくかなせる
真夏日と真冬日を幾度か繰返すとまとふばかり翁と姫
春落葉道一面に敷きつめて社の裏の楠の大木
太き枝ほしまま空に突き上げて社の大楠魔物のごとし
放射能あたふた量る人間を尻目に草木はのびのび茂る
玉ねぎの茎のみどりはのびやかに東へ南へ日ごと向き交ふ

椎名恒治 空

・橋

起き出でて先づ西の空を見る武藏野の果て富士山の方角
作夜の夢の名残のことく西へ西へ雲は流れて富士を隠せり
幾度も自覺め小用に立つわがふと「失禁」といふを思へり
ヒマラヤの瞿栗といふ蒼き花ガラス越しに立ち見てをり
移りきし冬たちまちに過ぎ春過ぎて多摩の山々黒黒と夏
ビヨウヤナギ・キンシバついづれがそれかまた迷ひをり
夕暮るる富士山はその全容をなかなか見せてはくれぬ

鈴木結志

歳時記の中

・福

吾妻嶺の残雪に見る雪うさぎ里に種子蒔き季を知らせる
コマーシャル映像に知る「聚楽よ」に日本一なる酒に親しむ
うたびとの宴の酒に身のほてり歳時記の中にいる思いなり
小滴の陽気天地にみなぎりて意気に感する朝の出で立ち
二十八宿「室」今日船出吉とあり首夏日和にて旅心わく
上流の「三ヶ月の滝」眼裏に渓谷沿いのみどりすがしむ
父ゆずり結志作之丞筆執りて見えぬものまで見ぬく筆執る

世木田照比古

一期一会

・茜

高尾恭子

五月の鶴

・大

再会をせしは非ざる数多なる名刺の整理に時を費やす

捨て切れぬ名刺あるなりすでに世をえたるとの縁断ちがたく

賜わりし名刺なりせば積みて置く一期一会の証とはして

繰りてみる名刺より頭つ思い出の濃きも薄きもわが心なり

一枚の薄き小さき紙なれどわが救われし憶い甦りぬ

景色など一切見ぬと決めたるか車内はスマホに牛耳られている

大型の簡易トイレがトラックより見下ろしている信号の前

根 榮 子

万葉の道

・埼

出できたるアルバム幾冊に迷いつつ過去を片付けていくにあらずや

耳朶を穿つことなく過ぎ来しがイヤリングさえ付けるもまれに

廻り道して草々を楽しみし野原も残土の置場となりぬ

遅れ来し思いに佇てり葉桜のはや深々と杜鎮まれり

紫陽花の次々と咲き梅雨はいまだ季節に追いつかぬわれかもしけぬ

成し遂げんこともなく過ぎはや五月炉を閉じ風炉に代えゆく今日は

いつの日か巡る思いのそのままに揃えいし本『万葉の道』

根 和 美

まえばし

・埼

雨あがり赤城あらわる利根川の鉄橋の音ひびく視界に

敷島の園に写生の幼女われ苦惱の詩人を知る由もなし

この利根の松原好みし朝太郎しおびて歩まん詩碑までの徑

医院継げぬ恩か者とぞ噂され うわさせし者何のことなき

広瀬川のせせらぎ近くに移されて修羅には遠き生家の一部

犀星に独逸人のようと言わしめき目鼻立ちちよくハイカラなりし

朝太郎の作曲というマンドリン曲譜面のベンあと動きあざやか

高 橋 和 代

文武両道

・桃

参道に朴の白花ひらきそめ地蔵尊へとこころのはやる

濃きみどり注連縄そして垂直に奔り落つ滝神聖なりき

滝壺のかたえに佇ちてすがすがしマイナスイオン身に沁むるまで

かすかにも流れる読経を頼りとし手さぐりにゆく洞窟めぐり

「水芭蕉二月にはもう咲きました」池に繁れる広葉にうなづく

地蔵さまを束子でこするとげぬき地蔵旅人われも臆せずにせん

たっぷりとマイナスイオン浴びしのち東小富士に別れを告ぐる

高 津 砂 千 子

中野不動尊

・風

祝婚の三十九年目うしろから抱きしめられて夕日があかい

遠き日を三十一文字が記憶する いぶりがっこと炊きたての飯

愛女魚の当て字が跳ねる角打ちの暖簾くぐりて牝猫になる

透明な身をしめたり青もみじ光こぼせる伊右衛門茶廊

打たれ強いと思つていたのにすぶ濡れの翼ためり五月の鳩

ユリカモメはや飛び立ちぬ鴨川をザンギリ頭の青年がゆく

口紅を初めてひいた日のようほいほい鴨川の飛び石わたる

滝田靖子 五月

・新

田土才恵 緑濃く

・緑

・宙

ネガティブな言葉に繰るネガティブな日常のネガティブなわたし
ネガティブな言葉に繰る日常にやはらかな君の声が射し込む
「ネガティブな言葉はやめなよ」やはらかな声がさくくれし胸に染みゆく
暗闇に伸ばした腕をつかまへて五月の扉開いてくれる
ああ今は五月ぢやないか何故こんな明るさに気付かなかつたのだらう
光降り光満ち満つ初夏の青葉の命わたしの命
さあ五月殻も鎧も脱き捨てて光の中へ歩き出さうよ

竹下妙子 水無月

・霧

ぱつぱつと降り出す雨にあら草も明日の命の輝きをもつ
命終へし薔の紅の失せたれど薦にからまり刺持てをり
鶯草よ飛び立つなかれ朝露にぬれよと出しし鉢中の花
庭園の繁みの中に山法師の白き花群光りかがよふ
八十路でふ齡にあれど焰立つありて裡にぞ秘め置きゆかむ
捨て難くまた仕舞ひ置く亡き母の白衣で縫ひし黒き服はも
縫糸のかかりしままの衣を遣し寡婦なりし母生業に生く

田土成彦

河口から

・宙

虎谷信子 バラの季

・伴

深呼吸五回ほどして仰ぎ見る梅雨晴れの空半袖のシャツ
蚊遣り火を焚くこともなく梅雨に入り電子蚊取り器のスイッチを入れる
餌を貰ふ返礼としてガラス球持ち来るといふカラスの話
ランタンを舳先に掲げこぎ出せば舟は宇宙の間行くごとし
甘酒をマイブームとして日毎飲むヘルシーなどと思はないけど
河口から十キロ地点と謝無村生誕の地はわが隣村
歌百首一時間で読み歌一首一時間で詠む苦行にも似て

真上よりプロペラ機に見る春の富士この旅の道さきわうごとく
真上より見る磐梯山あこれか噴火口かとつぶさに眺む
安達太良の山の稜線ゆうるりと春を逝かせて旅をい行ける
花の名を憶えず出でし園に降る五月のひかり福島の里
家々の防風垣の縁渡し里山近くハイジ住むらし
雪残す五月の山を珍しみ安達太良山の麓めぐれる
福島に溢れ来たれよ外つ國の声よあふれよ緑のまちに

玉井綾子 甘夏

・羊

パサパサの甘夏好みし少女期に角質層の渴きはあらず
口内炎いまだ治らぬ 甘夏を食みよみがえる昨日の表情
甘夏のしぶきは音も香も強く帰らぬ君の席にまで飛ぶ
おにぎりの素手で握られしは食えぬ、素手で剥かれし甘夏は如何
友達の家に遊びに行くと言いゲームするとは言わぬ子の鼻
ねだられるいかに備えネットにて「小二 ゲーム」と検索す初夏
公園に連れ出す、たんぱく質摂らす、子供につけたしピンクの筋肉
をちこちのバラ園便り 報じらる。月日の流れの速さも一人
うつは公園バラの盛りを訪ひゆけば、「梶井」の碑ひそと在りしも
一畝に色とりどりの バラ咲かせ、若き日ありき 夢多き日日
紫のバラ咲きたりと、言挙げて、誰彼に伝ふも。今は唯ごと
久びさに歳時記くれば、たのしけれ。かくゆたかなる年中行事
歳時記を 蝸牛考とも教はりし。杳き杳き日のことなるや
「蜗牛考再版出でて夏隣る」師の句をふとも 思ひ出する

中島央子 棚田

森

萩葉子道

道

春風にうたれ滅びる花おもふ今年卯月の風のきびしさ
いくめぐりせし歳月や鴨川の筈賜びしともがらの亡く
小さきあり大きもありぬ千枚田ふちどる畦の萌ゆる緑は
急斜面拓きし民をのびたり水の張られし「大山千枚田」
久しくも聞くことのなき季節の声われらを包む棚田の蛙
頂の不動尊への坂の道 友ありてこそわれは歩める
潮かをる鴨川に来て春の宵まづは一献レッドのワイン

中島義雄 九十年

岡

白子れい 緑みどり

洛

バス通りさけて通れば裏の道遠目に白い樹の花が咲く
絹さやの筋とりしどきふと昨日問われしことを鑑みて
延延と地下道歩いて文化村 地上の改札の方が良かつた
ベトナムから今帰ったと空港から妹夫婦の声に安堵している
命がけで横断歩道渡りしとベトナム帰りの妹の言う
おぼえある事ない事も問われれば答えようと思うのだけれど
まわし見て「若かったわね」目を細めウォーキング仲間と会食しつつ

もの書げずなる日あらむと思へどもひねもす怠惰に読書に暮らす
亡き者は風のこときかはらはらとこころもとなきべきページをめくる
ゆつくりと流れる雲にしばらくの喉預けて誕生日が逝く
喉裂ける絶望感も立ち向ふ歎喜もあらず九十歳終はる
ひたすらな凡夫を生きて九十年貧苦も怨憎も霧と流れて
長き世の長き力オスを曳きながら詠みて留めむものもなきなり
捨つるべき時には捨てよと神のこゑ死神もいつしか友となりゆく

永塚節子 音楽会

銀

ばばりょうこ ちいさき森

鹿

マンションの窓に泳げる鯉のぼり今年見たるはただ二本のみ
黒・赤・紺三尾の鯉のもつれつ語りあいつつ泳ぐは羨し
かえで葉の小さきみどりが空おおう緑みどりの清しき朝
ふかまれる楓青葉に包まれて手脚を伸ばす今日のはじまり
前よぎるたび花の名を声に出し記憶のとびら叩きつつゆく
水鉢にひらく睡蓮一輪のみ気候不順は庭にも及ぶ
白ひらくは蘋草またの名十葉と言ひ方ひとつでどくまた葉

ブルームスバッハに続きベートーヴェン三大Bのそれぞれの曲
三百年の年月を越え今にあるヴァイオリンのおんしょくやさし
いくたびも聴きし「運命」さりながら確信を持ち今日が一番
感動はわれのみならず並び聴く友はそつと涙を拭つ
両の腕高くにかかげ拍手送るひさかたぶりに痛くなるまで
ほろよいの心のままに出で来たる聴衆のため「段差あります」
ホールより出すればそこは人の波うつつの中にしばし入れず

わが庭はちいさき森とし際だらぬ自己主張あり 欠伸する木の
言の葉はひとり歩きさせ今日しばつかずはなれずの距離感をもとう
うすすみの羊羹をうすく切り病む口の中にそおっと入れやり
追われゆく刻に逆らいきょうひとひ時計を外す決断をせる
のとがかわくかわくよ近頃は溜飲を下げるがないから
雑草かと抜かすによかた紫の渡き小花つらなり 首飾りにせよと
次の世は青き蛙と生れきて水無月の花あじさいとあそば

浜 谷 久 子 いのち

・地

福 田 庸 子 五月に

・今

訃の報に旅の終わりを急ぐ道恩師は長い闘病のすえ
住職の座を降りる師は老朽の本堂新造に財を投げ打つ
跡を繼ぐ教え子還暦を前にして僧の修行の第二の人生
跡継ぎのない寺にして教え子は恩に報うと転身図る
師の葬儀は新本堂にて厳かにあまた僧侶の読経が続く
教え子は家族門徒衆の並ぶなか恩師の葬儀をおもおも進める
十年の住職経験教え子の恩を返す日師の弔いの

浜 本 芙 美

思い出

・夢

曾て住みし町内の奥に「はるちゃん」と呼びし朝鮮の少女の居りし
色白のふくらとした面さしの彼の「はるちゃん」はやさしかった
われよりも多分一、三歳年上の「はるちゃん」のこと不意になつかし
戦後すぐ上荷にひしきりの人混じり「はるちゃん」は朝鮮へ帰つた
よく遊んだ「はるちゃん」の消息はその後いつかいらず聞かず
十三歳の記憶は淡く「はるちゃん」は遠き彼の日の思い出の中
おとなえば只なつかしき旭川流れは遠き彼の日と交らじ

檜 垣 美 保 子

風の道

・昂

六月の桜並木は風の道おとこが走り自転車がゆく
山ぎわの公園に子らのかげはなく姫女苑の群れゆれているのみ
くすのきに鳥の姿はみえぬまま空の巣三つくりくしずむる
庭の木のもっとも高き梢みゆ二階の椅子にすわりたる朝
飛魚入りの即席だしの封を切り速さ自慢の一汁一菜
空豆を好むふたりの孫来たり空豆をむく五月あかるし
一途またひたすら一筋「職人の手仕事展」に竹を編むひと

藤 田 美 智 子

すげねえ

・新

早朝の苑に撒かれし玉砂利のやうな白つめ天よりのもの
おもはずも視線の先のクローバにひそむ四つ葉がかそかに盛ふ
ためらはず二つの四つ葉を手にしたる老女はひとり辺り見まはす
学び舎に友と探ししかの四つ葉戦時さなかの女学生なりき
川面より飛沫はね上げ鶴の助走ひろげし翼のいのち尊し
身めぐりの青葉若葉の陰ふかく対ふ朝餉はみどりの香る
而して蘭けゆく五月さはさはと蛇口の水は梅雨のあめ呼ぶ

藤 田 和 子

クローバ

・眉

どうしても非を認めぬを叱りし日「大人はどうか」と児は問はざりき
若き日のあれはセクハラ笑ひる男一人の顔浮かびくる
戻らざる息子夫婦を責めはせず「すげねえもんだ」とぼつり呟く
声を荒げることなく夫は黙しをり屋根打つ雨の不規則な音
処方されたる薬の効能に「うつ」とあり日の前に鬱の文字がふくらむ
治療よりいたはることが大事よと九歳下の教へ子は言ふ
白き葉が花とも見ゆるハクロニシキ誤解は勝手にするはうがする

ガラス一枚へだてて春の宵残し今日を生れたる蛾と見つめあふ
いっしかに小賀玉の香のただよへる亡き人の笑み近づく五月
田を捨てて烟となし日は遠く雑草の群占めてゆくなり
NHKのアナウンサーにも振り仮名が必要となる「みなも」と言へず
道草の楽しさ知らぬ子を乗せて統合校よりバス帰りゆく
米に代へブルーベリーを植ゑたる地品種を示すラベルしるけく
炊かれたる飯買ふ世なりいつのまに日本人の舌平らにさるる

六月の桃原邑子歌集『沖縄(新装版)』

シェーチェーとニイハオのみで四日間台北の旅無事に終りぬ
自動小銃下げた兵士が怒鳴りたりカメラを向けた台湾総督府
M.P.が怪しい奴と思ひしか立ち止まるなど次男に言はれる
秘宝とふ翠玉の白菜小さくてキリギリス・イナゴ分からぬ故宮
韓國の陽気なおばちゃん三人にシャッタ一頬まるタイペイ101

標識の忠孝、信義、仁愛の漢字が読める台北大通り
ラブラブでもないので妻と手を繋ぎ歩いた台北松山夜市

船田清子

藍ふかめゆく

・天

コンクリートの割れ目に萌ゆるカタバミのみどりほわほわほほ笑みかかる
刻々に藍ふかめゆく日の暮は「タダイマ！」と君の声する気配
天翔くる君なら吾をも率てゆかな雪の天山 玄奘の道

3と8、9・7、5・6見まちがふ老いの厳しさわが身を縛る
から松の芽吹きのみどり身に浴びて林の細道たどりゆかまし
末の子の仕事帰りに立ち寄りて「おやぢへ」と供ふ大福二つ
ふと気付く汝が誕生日へプレゼント？ 五月の空が笑ひてゐたり

久我田鶴子

白き苞

・羊

空をゆくものたちに向け花咲かせ山法師いま真つ盛りなり

四照花を見下ろしながら鳥ならず加藤紗千子をおもふ数日
白き苞四葩四葩をかさね咲く祈りはひかりあふれあふれてゆふがたのひかりがにじむるあひをうぐひす鳴けりいづより來たる
掌から掌へ見えざるままに渡されし貝殻の渦むらさき帯ぶる運転中の車に電話の呼び出し音ひとえらばすきみは応へて
るない間にそつと耳うちする声に忘れっぽくなつてゐる君を知る

読売新聞の「四季」欄に六月一日から十日まで連日、桃原邑子歌集「沖縄」の作品が取り上げられました。この欄に十回にもわたって取り上げられるというようなことは滅多にないことです。桃原邑子の生涯に寄り添つた、長谷川権氏の一首一首に対するコメントは敬意あるものでした。

取り上げられた作品は次の通りです。

* * *

・のたうちであげし声やがて肉焼くる音に変はりてひとは死にゆく
・親にはぐれ泣き叫ぶ子を見ぬふりに逃げてゆきたりわれもその一人

・この道は摩文仁への道足惡きわがついてゆけざりし道

・木麻黄の枝に首吊り懸れるたり集団自決にはぐれたるひと

・捕虜になるよりも死ねと教へたるわれは生きて児らは死にたり

・一瞬に爆ぜたるからだ見おろしてをりしか子の魂うろたへながら

・わが分けし生命はわれに還さむと子のししむらを衣に整へぬ

・撃られ死に焼け死に飢ゑ死にゆきしひと重なりて戦ひやみぬ

・生きのびることは絶対に悪なりきその悪をひきすり歩むいつまで

・本土よりの修学旅行の少年が平和の礎仰ぎ「ああ僕も戦死したい」

桃原邑子歌集「沖縄」を読んだ勝田裕司氏が、歌からインスピレーションを受けた作品を秋の個展で展示します。

日時 11月26日(月)～12月2日(日)

場所 銀座「あかね画廊」

中央区銀座4-13-14 筑波ビル2F (並木通り)

・かの戦に死体はまりぬし海溝を覗き楽しむグラスポート
・追はれ来て摩文仁の絶壁に身を投げし人らの転生・ピンクの珊瑚

■ ■ ■ 月の二人 ■ ■ ■

桜

有馬さと子

その後

ふりしきる桜吹雪に立ちつくしまぶたを閉じて花の声きく
あらん限り光を吸いて桜花 空いちめんに咲くを見にゆく
「美しいね」と言えばロボット「美しいね」桜の花のわかるAI
はるかなる岸辺をうずめて満開の花にさそわれ天満橋まで
遠見ゆるビルの谷間の桜花 商都浪速の四月が始まる
夜目しろくすそ野に波うつ桜花ボンボリ灯りが妖しくゆれて
財務省へ募る不信のうずたかし日本国中花きわまれど
吹かれたる桜花びら風来坊迷い迷いて止まるバス停
はらはらと花ふりかかる忠魂碑とおく軍靴の音きくおもいす
意地をはりつれなくしたり若き日の思い出話は花をあびつ
ふるさとのぞうりで駆けし校庭の桜は今も褪せることなし
思い出の土筆は田んぼの土堤の上ひょいと頭を出す不思議な坊や
安産を願いて築きし段葛古都鎌倉の桜まだ見す

夫が急逝してから十五年になります。
税理士の助言もあり家業を閉鎖しました。
子供も独立していたので私にとって自由な
時間ができました。幼児を抱えての仕事に
困った経験から、子供を持ち仕事をする母
親のお手伝いが出来ないかと保育センター
として多くの子供さんと関わりましたが、
かわいい刺激に遭遇でき、とても楽しい仕
事でした。

一方 遠隔地に住む私の孫と関わらなかっ
たのは今でも残念です。
又、高校時代に少し指導を受けた短歌を
と思いましたが、何もわからず調べると結
社はほとんど東京に本部があつたので、す
んなりと入ってゆくことができませんでした。
た。わからないままにある時「かりん」に
電話すると馬場あき子さんが出て来られた
にはびっくりしました。
偶然、若い頃に勤務していたところの集
まりの縁で「地中海」に紹介していただけ
たことは幸いなことでした。最近は物忘れ
が多く感動が鈍くなっていることが悩みで
すが、マイペースで詠んでいきたいと思っ
ています。

八重桜

牧 栄美

戦争反対

日本にて学ぶ異国の学生の熱きまなざし胸に重たし

ふるさとの家族想いて涙ぐむ青年の肩にそっと手を置く
母国語で語り合ひいる学生の生き生きとして優しき面差し
梅雨晴れの風耀いて匂うなり泰山木の花のまぶしき

さわさわと風吹きあぐる川岸の八重桜いまみごと咲きおり
百歳を過ぎてゆるりと歩みたる亡母をしのびてその影追いぬ
何すると決まらぬ朝の心にて初咲きのバラ心ゆすりぬ
誘われて春の散歩に出かけたる友と我との心なつかし

手折りたる一輪のバラ幾度も心ゆすりて「母の日」過ぎる
口ずさむ母の唱歌を思いつつ共に歩みし若き日なつかし
武器持たず人を殺さずそれ故に世界をさそう平和のかたち
戦争の無き日本を大切にわれらの力共に保たむ
草餅を母と作りし思い出が涙となりぬ笑いとなりぬ

私は大阪市西区に生まれましたが、戦争の時に南河内の方へ疎開、小学校、中学校を経て、新しい学校となつた高校は堺市。そこから新しい大学へ入学する時代を経験しました。男女共学の新しい大学で、私にとっては初めての経験をして、自分なりの努力をしたと思います。父母の努力もあり難く、戦争反対をがんばった家族だったと思います。父は六十代でなくなり、二人の兄も五十代でなくなり、結婚した妹と自身の私が、今までいろいろな経験をしながら、何とか元気に過ごせることを有り難く思っています。

その中で戦争を禁じ、戦争を許さぬ私たちの心は何ものにもかえ難く、この大切な生き方を続けることを第一としています。戦争反対の心はいかなる時代も世界中に向けて大切に守っていきたいと思います。

最後に、短歌については、今は亡き船田敦弘先生の御教えに深く感謝申し上げます。ご冥福を心よりお祈りいたします。

◆ 今月の二人・有馬さと子作品評 ◆

商都浪速の四月が始まる

有馬さんは、大阪市住之江区在住。「桜」と題してまとめた十三首には、大阪らしさと現代が響き合う。

・ふりしきる桜吹雪に立ちつくしまぶたを閉じて花の声きく
桜吹雪の中に立ちつくし、目を閉じて花の声を聞くとするには、演技が覗くが、連作の序の歌としてはよくできている。

・「美しいね」と言えばロボット「美しいね」桜の花のわかる
A-1 そんな時代が来ている。オウム返しというのではないらしい。
・はるかなる岸辺をうすめて満開の花にさそわれ天満橋まで
下の句が良い。「天満橋」という橋の名前が生きている。水都大阪の花の季節が、水辺の風景とともに目に浮かんでくるようだ。

・遠見ゆるビルの谷間の桜花 商都浪速の四月が始まる
大阪は商都でもある。なるほど、商都と言うときには「浪速」の方が相応しいようだ。この歌も下の句が良い。「商都浪速の四月が始まる」は、勢いがある。口語の力でもある。年度の始まりに相場が大きく動き出す感じもある。ところで、「遠見」という言葉はあるが、「遠くに見える」ということを「遠見ゆる」と表現しているらしい初句、少し無理がないか。

・意地をはりつれなくしたり若き日の思い出話は花をあびつ
桜吹雪を浴びながらする思い出話は、若き日の恋の話であった。今思えば、ずいぶんと意地を張つてつれなくしてしまつたものだ、と。桜が誘う思い出であり、この素直さも桜の花がもたらしたものかもしれない。

◆ 今月の二人・牧 栄美作品評 ◆

何すると決まらぬ朝の心

評者：久我田鶴子

牧さんも大阪市東淀川区在住。「八重桜」と題する十二首には、直接それを詠つたものは一首だけだった。

・日本にて学ぶ異国的学生の熱きまなざし胸に重たし
日本に来て学んでいる留学生を詠っているが、結句の「胸に重たし」がどこから来ているのかが分かりにくかった。次の歌で、家族を思つて涙ぐむ青年が詠われていることからすると、故国を離れ、家族からも遠く離れて学んでいる学生への心寄せがあるのだろう。「熱きまなざし」の奥を、重たく受け止めているのかもしれない。

・母國語で語り合ひる学生の生き生きとして優しき面差し
無理に日本語で話すではなく、母國語で語り合っているときの留学生の気持ちが、その話し方にも顔つきにも現れている。それを見ていて牧さんのホッとしたような思いも感じられる。

・百歳を過ぎてゆるりと歩みたる母をしのびてその影追いぬ
長生きをされた母上。百歳を過ぎてなおゆるりと歩いていた母の姿を思い出しては、亡き母を偲んでいる。

・何すると決まらぬ朝の心にて初咲きのバラ心ゆすりぬ
今日なにをするのか決まらない朝の心。その心に初咲きのバラが揺さぶりをかけてくる。花の咲く力が、そっと牧さん的心にも力を与えてくれたのだろう。

・草餅を母と作りし思い出が涙となりぬ笑いとなりぬ
母との思い出が、涙になつたり、笑いになつたりする。なにか切なさを感じさせる歌だ。下の句の、対句のような繰り返しが、切なさを宥めるような働きをしている。

「わが妻に真白き白衣着せてみて
ご気分いかがと言わせてみたい」

今から四十年程前に病床の長兄から届いた一通の葉書です。留守を守る妻には何も言わずに、その後兄は亡くなり、誰にも見せず私の机の奥深く仕舞われたままになりました。

「私と短歌との出会い」をと言われ、ふつと脳裏に浮かびなつかしさで胸が一杯になりました。

昭和十六年、兄は出征いたしました。その後、兄の部屋から「あけるな、ぜつたいに」と書いた箱を見つけました。幼かった次兄と私は毎日眺めて何が入っているか、さわり耳をつけていました。

小学校へ入学し高学年となつた次兄と家族のだれもいない日に開けてみようと相談し、息を殺し手を震わせながら開けてみました。紙の束でした。細かい字の沢山書かれた——。ただの紙の束に腰を抜かし動けなくなつたその驚きは今でも鮮明です。それから終戦までの数年幼い次兄と私は秘密を持ったまま復員して来た兄を迎える事になり、いつの間にか忘れて共に暮らしました。これは歌の原稿だったのかも知れません。

年月が経ち、息子三人を育て独立し、孫

の世話のみになり空しさを感じていたその頃、市の広報で短歌教室のある事を知り、覗いてみようと思い参加しました。何事も

長続きしない性とは知りながら……。

大勢の年齢差のある人達と触れ、月一回の集会がやがて楽しくなりました。

故石橋昭一郎先生のもと勉強会が始まり、先生は何の知識もない私にやさしく指導して下さいました。

石橋先生のものと勉強会が始まり、先生は何の知識もない私にやさしく指導して下さいました。

「ガサガサ」と音がなるたびうごき出す
枯葉うずまきカテカテカテと

赤丸をつけていただく事がうれしく、まるでおしゃべりでもするよう作りはじめました。そのうち「おばあちゃんよりうまいね」とほめられるようになりました。

ひかるは悲しい顔をして頑張っているおばあちゃんが可哀想だからやめると言いました。そのうち「おばあちゃんよりうまい

ね」とほめられるようになりました。

今は小泉支社長と共に月一回鎮守の社務所で歌会を開いています。高齢になり会員は九名です。生き字引きかと思われる小泉泰清支社長と神主で落語を趣味とする宇井秀雄さんと楽しいひと時を過ごしています。

勉強会の後は落語の一席を聴き、笑って閉会です。

いつの日か歌会の席で支社長から「このまままでいいでしょう」と言われたいです。

思いがけず長い間忘れていた兄を思い出す事が出来、感激で一杯です。

この度の事、心より感謝申し上げます。

行くようになり、小学二年の孫の「ひかる」がついて来るようになりました。

「お父さまが西におちると目をさます

夕顔の花タケの空」

「ガサガサ」と音がなるたびうごき出す
枯葉うずまきカテカテカテと

赤丸をつけていただく事がうれしく、まるでおしゃべりでもするよう作りはじめました。そのうち「おばあちゃんよりうまい

ね」とほめられるようになりました。

ひかるは悲しい顔をして頑張っているおばあちゃんが可哀想だからやめると言いました。そのうち「おばあちゃんよりうまい

私と短歌との 出会い

192

山角 和子

今原稿を書いている窓の外で鶯が鳴いています。思い出します。

短歌教室から聞こえて来る鶯の声に先生は「トッキヨトカキヨク」と鳴くのはホトトギスだと真面目な顔で教えてくれました。

夢のような時間を過ごさせていただきました。月一回先生のお宅へ添削をお願いに

第66回地中海全国大会（福島大会）

平成三十年五月二十日(日)二十一日(月)

会場・福島市 飯坂温泉ホテル聚楽

担当・新樹の会 協力・福島支社

第一回 五月二十日(日)

例年にも増して夏の訪れが早いように感じる、暑いほどの晴天。会場となつた飯坂町は、芭蕉が『奥の細道』の旅で訪れたことでも有名な、福島市郊外の歴史ある温泉地である。震災以降、風評被害の影響もあって経営が厳しい施設もあるが、ホテル聚楽では日帰り温泉の充実やイベントの開催など企業努力を続け、賑わいもかなり取り戻していると聞いた。

十二時から受付が始まり、次々に到着される運営委員の皆さんと一般会員の受付は、混同やチェック漏れのないように気を遣つた。旧知の会員同士、久しぶりの再会を喜び合う姿があちこちで見られる。途中J.R 東北線の遅延情報が入り、心配する場面もあつたが、時間までには参加者一〇三名全員が、無事受付を済ませた。

田美智子大会委員長の挨拶のあと、実務報告に入った。

久我田鶴子編集長より編集部の報告。編集作業についての報告のほか、今後の誌面で新しい企画を取り入れていきたいとの抱負も述べられた。

藤森総務部長からは昨年度の実務報告と今年度の行事計画等、永塚節子会計より昨年度の収支についての報告があった。会費未納者が一人もいなかつたとのこと、すばらしいことである。牧監査委員からは、会計監査の結果、すべてが適正に処理されているとの監査報告があった。

A欄昇格者審議では、小野雅子総務部副部長より二十一名の推薦案が出され、全員の昇格が承認された。

今年度の行事計画や予算案についても承認されたあと、各支社からの現状報告があつた。歌会の充実に務めている支社・グループもあるが、会員の高齢化によりなかなか集まらないなどの実態も報告され、貴重な交流の時間となつた。会員の減少について

は、湾の会の佐久間会長から会員拡大のための手立てについての話もあつた。

○互いに一つ一つの歌の良さを見つけようという共通の視点があり、共感し合う方向で和やかに話し合いが進んだ。

○大意がわかりにくい場合は積極的に質問したり、このように手直しすればどうか、

田美智子大会委員長の挨拶のあと、実務報告に入った。

久我田鶴子編集長より編集部の報告。編集作業についての報告のほか、今後の誌面で新しい企画を取り入れていきたいとの抱負も述べられた。

藤森総務部長からは昨年度の実務報告と今年度の行事計画等、永塚節子会計より昨年度の収支についての報告があった。会費未納者が一人もいなかつたとのこと、すばらしいことである。牧監査委員からは、会計監査の結果、すべてが適正に処理されているとの監査報告があった。

A欄昇格者審議では、小野雅子総務部副部長より二十一名の推薦案が出され、全員の昇格が承認された。

今年度の行事計画や予算案についても承認されたあと、各支社からの現状報告があつた。歌会の充実に務めている支社・グループもあるが、会員の高齢化によりなかなか集まらないなどの実態も報告され、貴重な交流の時間となつた。会員の減少について

は、湾の会の佐久間会長から会員拡大のための手立てについての話もあつた。

○互いに一つ一つの歌の良さを見つけようという共通の視点があり、共感し合う方向で和やかに話し合いが進んだ。

①運営委員会（一時～二時二十分）

議事進行は埼玉支社の関根和美さん。藤

②班別歌会Ⅰ（二時半～四時半）

今年は十班編成としたため、ひと班が十